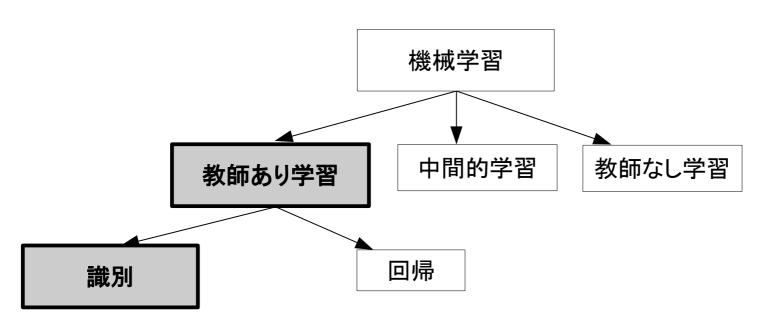
# 4. 識別 一統計的手法一



• カテゴリ特徴



• 数值特徵

• 最大事後確率則による識別

$$m{x}$$
:特徴ベクトル $C_{MAP} = rg \max_i P(\omega_i | m{x})$   $\omega_i \quad (i=1,\ldots,c)$ : クラス

- データから直接的にこの確率を求めるのは難しい
- ベイズの定理  $P(A|B) = \frac{P(B|A)P(A)}{P(B)}$

$$C_{MAP} = \arg \max_{i} P(\omega_{i}|\boldsymbol{x})$$

$$= \arg \max_{i} \frac{P(\boldsymbol{x}|\omega_{i})P(\omega_{i})}{P(\boldsymbol{x})}$$

$$= \arg \max_{i} P(\boldsymbol{x}|\omega_{i})P(\omega_{i})$$

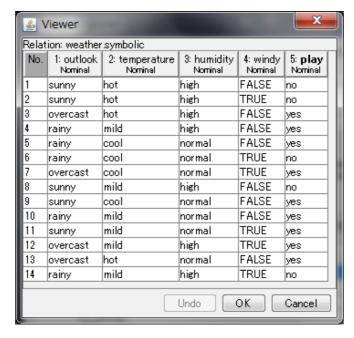
- ベイズ統計とは
  - 結果から原因を求める
- ベイズ識別
  - 観測結果 x から、それが生じた原因  $\omega_i$  を求める
  - 通常、確率が与えられるのは原因→結果(尤度)
  - ベイズ識別では、事前分布  $P(\omega_i)$  が、観測によって 事後分布  $P(\omega_i | \mathbf{x})$  に変化したと考えることができる

- 事前確率  $P(\omega_i)$ 
  - 特徴ベクトルを観測する前の、各クラスの起こりや すさ
- 事前確率の最尤推定

$$P(\omega_i) = \frac{n_i}{N}$$

N: 全データ数、 $n_i$ : クラス  $\omega_i$  のデータ数

- 尤度  $P(x|\omega_i)$ 
  - 特定のクラスから、ある特徴ベクトルが出現する尤もらしさ
- d 次元ベクトルの場合の最尤推定
  - 値の組合せが データ中に出 現しないもの 多数



Weka の weather.nominal データ 3×3×2×2=36 種類の組合せ

### 4.2 カテゴリ特徴に対するベイズ識別

### 4.2.1 学習データの対数尤度

- データの尤度
  - データを生成するモデルを考え、そのモデルがパラ メータ  $\theta$  に従ってデータを生成していると仮定

$$P(oldsymbol{x}|\omega_i,oldsymbol{ heta})$$
 以後、1 クラス分のデータを全データとみなす

- 全データは、それぞれ独立に生成されていると仮定
  - i.i.d (independent and identically distributed)

$$P(D|\boldsymbol{\theta}) = \prod_{i=1}^{N} P(\boldsymbol{x}_i|\boldsymbol{\theta})$$

### 4.2.1 学習データの対数尤度

- 対数尤度
  - 確率の積のアンダーフローを避けるため、対数尤度 で計算

$$\mathcal{L}(D) = \log P(D|\boldsymbol{\theta}) = \sum_{i=1}^{N} \log P(\boldsymbol{x}_i|\boldsymbol{\theta})$$

### 4.2.1 学習データの対数尤度

- 最尤推定法
  - 特徴ベクトルが 1 次元、値 0 or 1 で、ベル ヌーイ分布に従うと仮定
    - ベルヌーイ分布:確率  $\theta$  で値 1 、確率 1- $\theta$  で値 0 をとる分布

$$\mathcal{L}(D) = \sum_{i=1}^{N} \log \theta^{x_i} (1 - \theta)^{1 - x_i}$$

$$= \sum_{i=1}^{N} x_i \log \theta + (N - \sum_{i=1}^{N} x_i) \log(1 - \theta)$$

### 4.2.1 学習データの対数尤度

• 対数尤度を最大にするパラメータ

• 
$$\frac{d\mathcal{L}(D)}{d\theta} = 0$$
 の解を求める

### 4.2.2 ナイーブベイス識別

- ナイーブベイズの近似
  - 全ての特徴が独立であると仮定

$$P(\boldsymbol{x}|\omega_i) = P(x_1, \dots, x_d | \omega_i)$$

$$\approx \prod_{j=1}^d P(x_j | \omega_i)$$

$$C_{NB} = \arg \max_i P(\omega_i) \prod_{j=1}^d P(x_j | \omega_i)$$

## 4.2.2 ナイーブベイス識別

### • 尤度の最尤推定

$$P(x_j|\omega_i) = \frac{n_{ij}}{n_i}$$

 $n_{ij}$ : クラス  $\omega_i$  のデータのうち、j 次元目の値が  $x_j$  の個数

#### ゼロ頻度問題

### 確率の m 推定

$$P(x_j|\omega_i) = \frac{n_{ij} + mp}{n_i + m}$$

p: 事前に見積もった各特徴値の割合

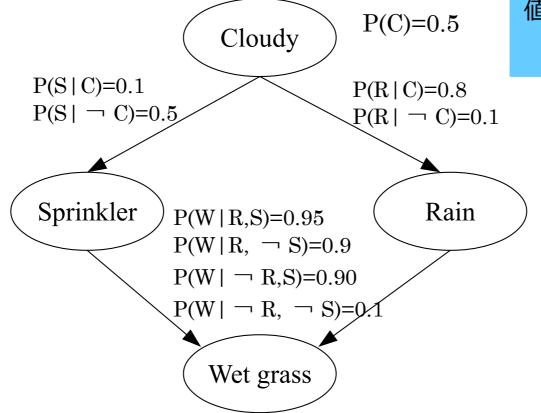
m: 事前に用意する標本数

#### • ラプラス推定

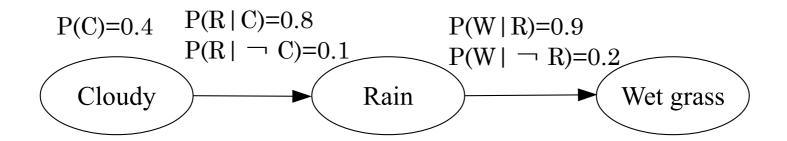
- m: 特徴値の種類数、 p: 等確率 とすると、 mp=1

- ベイジアンネットワークの仮定
  - 変数の部分集合が、ある分類値のもとで独立である

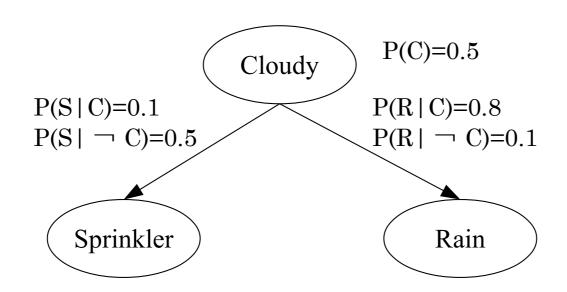
双の部分集合か、ある分類値のもとで独立である
$$P(x_1,\ldots,x_d)pprox \prod_{i=1}^d P(x_i|Parents(X_i))$$
  $(Cloudy)$   $P(C)=0.5$   $(Div X_i)$   $(Di$ 



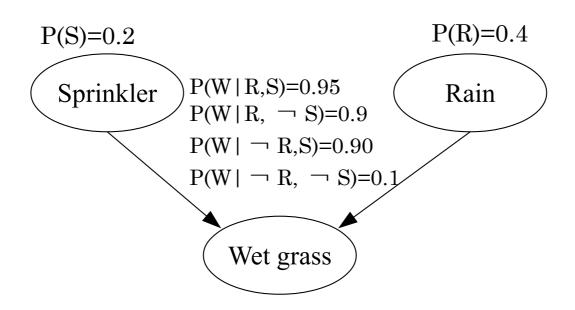
- ベイジアンネットワークの構成
  - Head-to-tail



- ベイジアンネットワークの構成
  - Tail-to-tail



- ベイジアンネットワークの構成
  - Head-to-head



### 4.3.3 ベイジアンネットワークを用いた識別

- 確率伝播による計算
  - クラスを表すノードに対して、すべての子ノードの値が得られていれば、条件付き確率表から求まる
  - そうでない場合は、値のわかっているノードから、 目標のノードまで値を伝播させる
- 確率的シミュレーションによる方法
  - ・ネットワークに与えられた確率に基づいて変数値の 組み合わせを多数発生させ、目的変数の値を推定する

### 4.3.4 ベイジアンネットワークの学習

- 基本的な考え方
  - データの対数尤度が最大となる構造を探す

#### **Algorithm 4.2** K2 アルゴリズム

```
ノードの順番を決める(通常はクラスを表す特徴を最初に)
for all n \in Node do
 for all n' \in n+1 以降のノード do
   if n から n' へのアークを追加することにより対数尤度が増加 then
    n から n' へ、アークを追加
   end if
 end for
 if 対数尤度が変化しない then
   break
 end if
end for
return 学習されたベイジアンネットワーク
```